

日本の企業と経営者

令和7年2月6日

黒田インターナショナルコンサルティング LLC

黒田 毅

日本の企業文化は、その経済発展とともにワーキングビーとして、その今日を有する。それらは偉大なドラマである。

勤労性という基盤は今日においても、その労働環境において存在する。これが日本の強さであり、弱さである。

新しい技術とシステムへの転換は、グローバルゼーションという世界の現実が日本を変化させているのである。

しかしすべての経営者は、自己企業の経営に対してその独自判断を要求され、この企業の独立性は、異なる未来への選択なのである。

これらは企業が資本の下、判断を得る西洋の現実に対して、あまりにも家族的な現実を有するものである。

これらが日本的経営の基盤であり、強さであり、弱さなのである。

上記2項において、強さと弱さを伝えたことは、正しい企業への説明であり、今日の企業への警鐘を与えられると考える。

勤労性の追求は、知的生産性と創造性への転換において、弱さとなる。家族的経営は、同一性を追求することで、創造性を否定するのである。これが弱さである。

また勤労性は企業の正しい企業風土を与える。これは強さである。家族的経営は、その団結とともに、企業の強さを与えるのである。

これら相反する現実は双方において、正しいと考える。これらはすべての日本の企業が自己の考査を求められ、新しい未来への参加を再度検討しなくてはならないと考えるものである。

これらは経営者たちの使命であり、グローバルゼーションという現実への経営判断への個人的な考察の提案である。

これらは世界における競争と資本力という現実へ、開国というアベノミクスにおいて、放り出されるのである。これらは、ヤギがオオカミの群れへ投げ出されるの同じである。

これらは企業文化における変化であり、日本のビジネスマンが、直面する新しい危機なのである。

これらは、世界のメジャーという現実が、新しい未来を提案するとき、その現実は不可避の現実として企業へ選択を求めるためなのである。

これらがグローバル経済と金融という世界の現実への参加なのである。

これらは未来という踏み絵であり、その新しい基準への企業の参加である。

経営という判断は経営者へ与えられ、これら新しい現実への参加を要求されるのである。